

伊勢之卷

泉鏡花

青空文庫

昔男と聞く時は、今も床しき道中姿。その物語に題は通えど、これは東の銭^{あずま}なしが、一^ひ年^{ととせ}思いたつよしして、参宮を志し、霞^{かすみ}とともに立出でて、いそじあまりを三河国^{みかわのくに}、そのから衣、ささおりの、安弁当の鰯^{いわし}の名に、紫はありながら、杜^{かきつばた}若^{ういもうで}には似もつかぬ、三等の赤切符。さればお紺の婀娜^{あだ}も見ず、弥次郎兵衛^{やじろべゑ}が洒落^{しやれ}もなき、初^{ういもうで}詣^よの思ひ出草。宿屋の硯^{すずり}を仮寝の床に、路^{みち}の記の端に書き入れて、一寸^{ちよいとごけん}御見^{ごけん}に入れたりしを、正綴^{ほんとし}にした今度の新版、さあさあかわりました双六^{すろく}と、だませば小兒衆^{こどもしゅ}も合点せず。伊勢^{いなたび}は七度^{ななたび}よいところ、いざ御案内者で客を招けば、おらあ熊野へも三度目^{みたびめ}じやと、いわれてお供に早がわり、いそがしかりける世渡りなり。

明治三十八乙巳年十月吉日

鏡花

一

「はい、貴客あなたもしお熱いのを、お一つ召上りませぬか、何ぞお食あがりなされて下さりまし。」
伊勢国古市ふるいちから内宮ないぐうへ、ここぞ相あいの山こなたの此方ともしに、灯あしびの淋しい茶店。名物あかふくもち赤福餅の旗、如月きさらぎのはじめ三日の夜嵐に、はたはたと軒ゆすを揺り、じりじりと油が減つて、早や十二時に垂なんなんとするのに、客はまだ帰りそうにもしないから、その年紀頃としごろといい、容子ようすといい、今時の品の可いい学生風、しかも口数を利かぬ青年なり、とても話対手はなしあいてにはなるまい、またしないであろうと、断念あきらめていた婆々ばばが、堪たまり兼ねてまず物優しく言葉をかけた。
宵から、灯も人声も、往來ゆききの脚も、この前あたりがちようど切目で、後へ一町、前へ三町、そこにもかしこにも両側の商家軒を並べ、半襟まえたれと前垂まえだれの美しい、姐ねえさんが袂たもとを連ねて、式かたのごとく、お茶あがりまし、お休みなさりまし、お飯まんま上りまし、お饅頭うぜんもござりますと、媚めかしく呼ぶ中を、頬ほっかむり冠かむりやら、高帽たかぼうやら、菅笠すががさを被かぶつたのもあり、脚絆きやはんがけに借下駄かりげたで、革靴かばんを提げたものもあり、五人づれやら、手を曳ひいたの、一人で大手を振るもあり、笑い興ずるぞめきに交まじつて、トンカチリと楊弓ようきゅう聞え、諸白もろはくを燗かんする家や

ごとの煙、両側の廂を籠めて、処柄とて春霞、神風に飄飄く風情、灯の影も深く、浅く、奥に、表に、千鳥がけに、ちらちらちらちら、吸殻も三ツ四ツ、地に溢れて真赤な夜道を、人脚繁き賑かさ。

花の中なる枯木と観じて、独り寂寞として茶を煮る嬬、特にこの店に立寄る者は、伊勢平氏の後胤か、北畠殿の落武者か、お杉お玉の親類の筈を、思いもかけぬ上客一人、引手夥多の彼処を抜けて、目の寄る前途へ行き抜けもせず、立寄ってくれたので、国主に見出されたほど、はじめ大喜びであつたのが、灯が消え、犬が吠え、こうまた寒い風を、欠伸で吸うようになって、まだ出掛けそうな様子も見えぬので。

「いかがでございます、お酌をいたしましょうか。」

「いや、構わんでも可い、大層お邪魔をするね。」

とももの優しい、客は年の頃二十八九、眉目秀麗、瀟洒な風采、鼠の背広に、同一色の濃い外套をひと緒うて、茶の中折を真深う、顔を肅ましげに、脱がずにいた。もしこの冠物が黒かつたら、余り頬が白くって、病人らしく見えたであろう。

こつくりした色に配してさえ、寒さのせいか、屈託でもあるか、顔の色が好くないのである。銚子は二本ばかり、早くから並んでいるのに。

赤福の餅もちの盆、煮染にしめの皿も差置いたが、猪口ちよくも数を累かさねず、食べるものも、かの神路かみじや山の杉すぎ箸ばしを割わったばかり。

客は丁字形ていじけいに二つ並べた、奥の方の縁台に腰をかけて、掌てのひらで項うなじを圧おさえて、俯向うつむいたり、腕こまぬを拱こまぬいて考えたり、足を投げて横よこざまに長くなったり、小さなしかも古びた茶店の、薄暗うすい隅かたなる方に、その挙動ふるまいも朦朧もうろうとして、身動みうごきをするのが、余所目よそめにはまるで寝返ねがえりをするようであつた。

また寝られてなろうか！

「あれ、お客様まだこっちのお銚子もまるでお手が着きませぬ。」

と婆々は片づけにかかる気で、前の銚子かたえを傍わへ除のけようとして心付く、まだずっしりと手こたに應こたえて重い。

「お爛を直しましょうでござりますか。」

顔を覗のぞき込むがごとくに土間に立つた、物腰のしとやかな、婆々は、客の胸のあたりへその白髪頭しらがあたまを差出したので、面おもてを背けるようにして、客は外との方かたを視ながめると、店頭みせさきの釜かまに突込んで諸白の爛をする、大きな白はくちよう丁うの、中が少なくなったが斜めに浮いて見える、上なる天井から、むツくりと垂れて、一つ、くると巻いたのは、蛸たこの脚、夜の色濃こまやかに、

寒さに凍てたか、いぼが蒼い。

二

涼しい瞳を動かしたが、中折の帽の底の下から透して見た趣で、

「あれをちつとばかりくれないか。」と言つてまた面を背けた。

深切な婆々は、膝のあたりに手を組んで、客の前に屈めていた腰を伸して、指された章魚を見上げ、

「旦那様、召上りますのでござりますか。」

「ああ、そして、もう酒は沢山だから、お飯にしよう。」

「はいはい、……」

身を起して背向になつたが、庖丁を取出すでもなく、縁台の彼方の三畳ばかりの住居へ戻つて、薄い座蒲団の傍に、散ばつたように差置いた、煙草の箱と長煙管。

片手でちよつと衣紋を直して、さて立ちながら一服吸いつけ、

「旦那え。」

「何だ。」

「もう、お無駄でござりまするからお止しなさりまし、第一あれは余り新しゅうないのでござります。それにお見受け申しました処、そうやって御酒もお食いなさりませず、滅多に箸をお着けなさりません。何ぞ御都合がおりなさりまして、私どもにお休み遊ばします。時刻が経ちまするので、ただ居てはと思召して、婆々に御馳走にあなた様、いろいろなものをお取り下さりますように存じます、ほほほほ。」

わらい
笑とともに煙を吹き、

「いいえ、お一人のお客様には難有過ぎましたほど儲かりましてございます。大抵のお宿錢ぐらい頂戴をいたします勘定でござりますから、私どもにもう一室、別座敷でもござりますなら、お宿を差上げたい位に、はい、もし、存じまするが、旦那様。」

婆々は框に腰を下して、前垂に煙草の箱、煙管を長く膝にしながら、今こう謂われて、急に思い出したように、箸の尖を動かして、赤福の赤きを顧みず、煮染の皿の黒い蒲鉾を挟んだ、客と差向いに、背屈みして、

「旦那様、決してあなた、勿体ない、お急立て申しますわけではないのでござりますが、もし、お宿はお極り遊ばしていらつしやいますかい。」

客はものいわず。

「一旦いったんどこぞにお宿をお取りの上に、お遊びにお出掛けなさりましたのでござりますか。」

「何、山田の停車場ステーションから、直ぐに、右内宮道ないぐうちとある方へ入って来たんだ。」

「それでは、当伊勢はお馴れ遊なばしたもので、この辺には御親類でもありませんという。——」と、婆々は客の言ことば尻じりについて見たが、その実、土地馴れぬことは一目見ても分るのであった。

「どうして、親類どころか、定宿じょうやどもない、やはり田舎ものの参宮さ。」

「おや！」

と大きく、

「それでもよく乗越しておいでなさりましたよ。この辺までいらっしゃいます前には、あの、まあ、伊勢へおいで遊ばすお方に、山田が玄関なら、それをお通り遊ばして、どうぞこちらへと、お待受けの別嬪べっぴんが、お袖そでを取るばかりにして、御案内申します、お客座敷と申しますような、お褥しとねを敷いて、花をいけました、古市があるではござりませぬか。」

客は薄ら寒そうに、これでもと思う状さま、爛かんの出来立できたちのを注いで、猪口ちよくを唇もたに齎もたらしたが、

におい^か匂を嗅いだばかりでしばらくそのまま、持つ内に冷くなるのを、飲む真似^{まね}して、重そうにとんと置き、

「そりや何だろう、山田からずツと入ると、遠くに二階家を見たり、目の前に茅葺^{かやぶき}が顕^{あらわ}れたり、そうかと思うと、足許^{あしもと}に田の水が光つたりする、その田圃^{たんぼ}も何となく、大な庭^{おおき}の中にわざと拵^{こしら}えた景色のような、なだらかな道を通り越すと、坂があつて、急に両側^{まっか}が真赤になる。あすこだろう、店頭^{みせさき}の雪洞^{ばんぼり}やら、軒提灯^{のきちようちん}やら、そこは通つた。」

三

「はい、あの軒ごと、家ごと、向三軒両隣と申しました工合^{ぐあい}に、玉^{たま}転^{ころが}し、射的^{たけ}だの、あなた、賭^{かけ}的^まがござりまして、山のように積んだ景物の数ほど、灯^{あかり}が沢山^つ点きまして、いつも花盛りのような、賑^{にぎ}やかな処でござります。」

客は火鉢に手を翳^{かざ}し、

「どの店にも大きな人形を飾つてあるじやないか、赤い裌襠^{しかけ}を着た姐様^{ねえさん}もあれば、向う^{はちまき}願^{ねが}巻をした道化もあるし、牛若もあれば、弥次郎兵衛^{やじろべえ}もある。屋根へ手をかけそうな大

蛸おだこが居るかと思うと、腰こし蓑みので村雨むらさめが隣の店に立っているか、下駄屋にまで飾ったな。
 皆みんな極彩色だね。中にあの三間げんまぐち間口一杯ほていの布袋ふくろが小山のような腹を据えて、仕掛けだろう、
 福相な柔和な目も、人形が大きいからこの皿ぐらいあるのを、ぱくりと遣やつちや、手に持
 った団扇うちわをばさりばさり、往來を煽あおいで招くが、道幅の狭い処へ、道中どうちゆう双六すうろくで見覚え
 の旅の人の姿が小さいから、吹飛ばされそうです。それに、墨こころもの法衣ころもの絵具が破れて、肌
 の斑まだらはげ元まねきの様子なんざ、余程すい凄しい。」
 「招まねきも善よし悪あしでござりまして、姫方こどもしゆうこや小兒衆は恐いとおっしゃって、旅籠屋はたごやで魘うなされるお
 方もござりますそうでござりまする。それではお氣味が悪くって、さっさと通り抜けてお
 しまいなされましたか。」

「詰つまらないことを。」

客は引ひき緊しまった口許くちもとに微笑した。

「しかし、土地にも因るだろうが、奥州の原か、飛驒ひだの山で見た日には、氣絶をしないじ
 や済むまいけれど、伊勢というだけに、何しろ、電信柱くつつに附着くつつけた、ペンキ塗ぬりの広告まで、
 土佐絵を見るような心持のする国だから、赤い唐縮緬とうちりめんを着た姐さんでも、京人形ぐらい
 には美しく見える。こつちへ来るといので道中も余所よそとは違って、あの、長良川、揖斐いび

川^{がわ} 木曾川の、どんよりと三条^{みすじ}並んだ上を、晩方通ったが、水が油のようだから、汽車の音もしないまでに、鵲^{かさぎぎ}の橋を^{すべ}に^{あまのがわ}銀河を渡ったと思った、それからというもの、夜に入^いつてこの伊勢路へかかるのが、何か、雲の上の国へでも入るようだったもの、どうして、あの人形に、心持を悪くしてなるものか。」

「これは、旦那様^{だんなさま}お世辞^いの可い、土地を賞^ほめられまして何より嬉しゅうござります。で何でござりまするか、一刻も早く御参詣^{ごさんけい}を遊ばそう思召^{おほしめし}で、ここらまで乗切^{おぼしめし}つていらつしやいました？」

「そういうわけでもないが、伊勢音頭を見物するつもりもなく、古市より相の山、第一名^いが好^いいではないか、あいの山。」

客は何思^ほいけん手を頬^{ほお}にあてて、片手で弱々と胸^{いた}を抱^{いだ}いたが、

「お婆^{ばあ}さん、昔^きから聞^き馴染^{なじみ}染^しの、お杉お玉というのは今でもあるのか。」

「それはござりますよ。ついこの前途^{さき}をたらたらと上りました、道で申せばまず峠^{さみせん}のよう^{ちよう}な処^{みせもの}に観^み世物^{せもの}の小屋^{こや}がけになつて、やつぱり紅白粉^{べにおしろい}をつけましたのが、三味線^{さみせん}でお鳥^{ちよう}目^{もく}を受けるのでござります、それよりは旦那様^{だんなさま}、前方^{さき}に行つて御覧^{ごらん}じやりまし、川原^{かわはら}に立^たつておりますが、三十人、五十人、橋^{はし}を通行^{ゆきき}のお方^{かた}から、お錢^{あし}の礫^{つぶて}を投^なげて頂^ていて、手

ン手に長棹ながざおの尖さきへ網を張りましたので、宙で受け留めますが、秋口蜻蛉とんぼの飛びますようでござります。橋たもとの袂たもとには、女房達が、ずらりと大地に並びまして、一文二文に両りようが換えをいたします。さあ、この橋が宇治橋と申しまして、内宮様へ入口でござります。川は御存じの五十鈴川いすずがわ、山は神路山かみじやま。その姿の優しいこと、氣高いこと、尊いこと、清いこと、この水に向うて立ちますと、人膚ひとはだが背後うしろから皮を透とおして透いて見えます位、急にも流れず、淀みよどもしませず、浪なみの立つ、瀬というものもござりませぬから、色も、蒼あおくも見えず、白くも見えず、緑の淵ふちにもなりません、一様に、真ほんの水色というのでござりますよ。

渡りますと、それから三千年の杉の森、神代かみよから昼も薄暗い中を、ちらちらと流れまする五十鈴川を真中まんなかに、神路山が裏つづみまして、いつも静しずかに、神風がここから吹きます、ここに白木造しろぎづくりの尊いお宮がござりまする。」

四

「内宮ないぐうでいらつしやいます。」

婆々^{ばば}は掌^てを挙げて白髪^{はく}の額^がに頂^うき、

「何事^{なに}のおわしますかは知らねども、忝^{かたじけな}さに涙^{なみだ}こぼるる、自然^{ひとりで}に頭^{つむり}が下りまする。お帰

りには二見^{ふたみ}ヶ浦、これは申上げるまでもござりませぬ、五十鈴川の末、向うの岸、こつち

の岸、枝の垂れた根上り松に纏^もいまして、そこへ参る船もござります。船頭^{ふね}たちがなぜ素

袍^{おう}を着て、立烏帽子^{たてえぼし}を被^かつていないと思うような、尊い川もござりまする、女の曳^ひきます

俣^{くるま}もござりまする、ちようど明日は旧の元日。初日の出、」

いいかけて急に膝^{ひざ}を。

「おお、そういえば旦那様^{だんなさま}、お宿はどうなさります思召^{おぼしめし}。

成程、おつしやりました名の通^{とお}、あなた相の山までいらつしやいましたが、この前方^{さき}へ

おいでなさりまして、佳い宿はござりません。後方^{あと}の古市^{ふるいち}でござりませんと、旦那様

方^{かた}がお泊りになりまする旅籠はござりませんが、何にいたしました処で、もし、こここの

とでござりまする、必ず必ずお急^せき立て申しますではないのでござりまするけれども、お

早く遊ばしませぬと、お泊^{とまり}が難しゅうござりまするので。

はい、いつもまあこうやって、大神宮様のお底^かで、繁昌^{はんじよう}をいたしますが、旧の大

晦日^{おみそか}と申しますと、諸国の講中^{こうじゆう}、道者^{どうじや}、行者^{ぎやうじや}の衆^{しゆ}、京、大阪は申すに及びま

せぬ、夜一夜、古市でお籠こもりをいたしまして、元朝、宇治橋を渡りまして、貴客あなた、五十鈴川で嗽手水うがいちようず、神路山を右に見て、杉の樹立こたちの中を出て、御廟おたまやの前でほのぼのと白みますという、それから二見ヶ浦へ初日の出を拝みに廻られます、大層な人数。

旦那様お通りの時分には、玉ころがしの店、女郎屋の門かどなどは軒並戸のきなみが開いておりましてございましょうけれども、旅籠屋は大抵戸を閉めておりましたことと存じます。

どの家も一杯で、客が受け切れませんのでござります。」

婆々はひしひし、大手の木戸に責め寄せたが、

「しかし貴客あなた、三人、五人こぼれますのは、旅籠はたごやでも承知のこと、相宿でも間に合いますよ。」

と搦手からめてを明けて落ちよというなり。

けれども何の張合もなかった、客は別に騒ぎもせず、さればって聞棄ききすてにもせず、何の機会きっかけもないのに、小形の銀の懷中時計をぱちりと開けて見て、無雑作に突つ込んで、

「お婆さん、勘定だ。」

「はい、あなた、もし御飯おまんまはいかがでござります。」

客は仰向あむむいて、新あらたに婆々の顔を見て莞爾かんじとした。

「いや、実は余り欲しくない。」

「まあ、ソレ御覧ごらんじまし、それなのに、いかなこツても、酢蛸すだこを食あかりたいなぞとおつしやつて、夜遊びをなすつて、とんだ若様でござります。どうして婆々が家の一膳飯いちぜんめしがお口に合いますものでござります。ほほほほ。」

「時に、三由屋みよしやという旅籠はあるね。」

「ええ、古市一番の旧家で、第一等の宿屋でござります。それでも、今夜あたりは大層なお客でござりましよ。あれこれとおつしやつても、まず古市では三由屋で、その上に講こうも元のことでござりまするから、お客は上中下とも一杯でござります。」

「それは構わん。」といつて客は細く組違えていた膝を割つて、二ツばかり靴の爪尖つまさきを踏んで居直つた。

「まあ、何ということでござります、それでは氣を揉もむではなかったに、先へ誰方どなたぞお美しいのがいらしつて、三由屋でお待受けなのでござりますね。わざと迷まいご兒になんぞおなり遊あそばして、可ようござります、翌日あすは暗い内から婆々が店頭みせさきに張番をして、芸妓げいこさんとも腕車くるまで通つて御覧じやい、お望のぞみの蛸の足を放りつけて上げますに。」と煙草きせるを下へ、手

で掬つて、土間から戸外へ、……や……ちよつと投げた。トタンに相の山から戻腕車、店さきを通りかかつて、軒にはたはたと鳴る旗に、フト楯を持ったまま仰いで留る。

「車夫。」

「はい。」と媚しい声、婦人が、看板をつけたのであつた、古市組合。

五

「はッ。」

古市に名代の旅店、三由屋の老番頭、次の室の敷居際にぴたりと手をつき、

「はッ申上げますでございまする。」

上段の十畳、一点の汚もない、月夜のような青畳、紫縮緬ふツくりとある蒲団に、あたかもその雲に乗つたるがごとく、堇の中から抜けたような、装を凝した貴夫人一人。さも旅疲の状見えて、鼠地の縮緬に、麻の葉鹿の子の下着の端、媚かしきまで膝を斜に、三枚襲で着痩せのした、撫肩の右を落して、前なる桐火桶の縁に、引つけた火箸に手をかけ、片手を細りと懷にした姿。衣紋の正しく、顔の気高きに似ず、見好

に過ぎて婀娜めくばかり。眉の鮮かき、色の白さに、美しき血あり、清き肌ある女性
とこそ見ゆれ、もしその黒髪の柳濃く、生際の颯と霞んだばかりであつたら、画ける幻
と誤るであろう。袖口、八口、裳を溢れて、ちらちらと燃ゆる友染の花の紅にも、
絶えず、一叢の薄雲がかかつて、淑ましげに、その美を擁護するかのごとくである。

岐阜県××町、——里見稲子、二十七、と宿帳に控えたが、あえて誌すまでもない、岐

阜の病院の里見といえ、家族雇人一同神のごとくに崇拜する、かつて当家の主人が、難
病を治した名医、且つ近頃三由屋が、株式で伊勢の津に設立した、銀行の株主であるから。

晩景、留守を預るこの老番頭にあてて、津に出張中の主人から、里見氏の令夫人参宮あ

り、丁寧に宿を参らすべき由、電信があつたので、いかに多数の客があつても、必ず、一
室を明けておく、内証の珍客のために控えの席へ迎え入れて、滞りなく既に夕餉を進めた。

されば夫人が座の傍、肩掛、頭巾などを引掛けた、衣桁の際には、萌黄の緞子の夏
袢、高く、柔かに敷設けて、総附の塗枕、枕頭には蒔絵ものの煙草盆、鼻

紙台も差置いた、上に香炉を飾つて、呼鈴まで行届き、次の間の片隅には棚を飾つて、
略式ながら、薄茶の道具一通。火鉢には釜の聲、遙に神路山の松に通い、五十鈴川の流に
応じて、初夜も早や過ぎたる折から、ここの行燈とかしこのランプと、ただもう取交え

るばかりの処。

「ええ、奥方様、あなた様にお客にござりまして。」

優しい声で、

「私に、」と品よく応じた。

「はッ、あなた様にお客きやくらい来にござりまする。」

夫人はしとやかに、

「誰方どなただね、お名札は。」

「その儀にござりまする。お名札をと申しますと、生憎あいにく所持せぬ、とかようにおっしゃいます、もつともな、あなた様お着つきが晩おそうござりましたで、かれこれ十二時。もう遅うござりますに因つて、御一人旅の事ではありまするし、さようなお方は手前どもにおいでがないと申して断りましようかとも存じましたなれども、たいせつなお客様、またどのような手落になりましたも相成らぬ儀と、お伺いに罷出まかりでましてござりまする。」

番頭は一大事のごとく、固くなつて、御意を得ると、夫人は何事もない風情、
「まあ、何とおっしゃる方。」

「はッ立花様。」

「立花。」

「ええ、お少い^{わか}お人柄な綺麗^{きれい}な方でおあんなさいます。」

「そう。」と軽く^{かろ}いつて、莞爾^{にっこり}して、ちよつと膝を動かして、少し火桶を前へ押して、
「ずんずんいらつしやれば可い^いのに、あの、お前さん、どうぞお通し下さい。」

「へい、宜し^{よろ}ゆうござりますか。」

頤^{おとが}の長い顔をぼんやりと上げた、余り夫人の無雑作なのに、ちと氣抜けの体^{てい}で、立^{たち}揚^{あが}
る膝が、がツくり、ひよろりと手をつき、苦^{にが}笑^{わらい}をして、再び、

「はッ。」

六

やがて入^{いり}交^{かわ}つて女中が一人^{いちにん}、今夜の忙しさに親類の娘が臨時手伝という、娘柄^{こがら}の好^い
い、爪^{つま}はずれの尋常なのが、

「御免遊ばしまし、あの、御支度はいかがでございます。」

夫人この時は、後^{おく}毛^{くれ}のはらはらとかかった、江戸紫の襟に映る、雪のような項^{うなじ}を此^こ方^{なた}

に、背うしろむき向むに火桶ひおけに凭より掛かつていたが、輕かろく振向ふむき、

「ああ、もう出来てるよ。」

「へい。」と、その意を得ない様子で、三指みつゆびのまま頭つむりを上げた。

事もなげに、

「床なんだろう。」

「いいえ、お支度でございですが。」

「御飯かい。」

「はい。」

「そりやお前まい疾しゅうに済んだよ。」と此方こなたも案外な風情、余あまりの取込とりこみにもの忘れた、旅籠屋はたごやの混雑こんさつが、おかしそうに、莞爾にっこりする。

女中はまた遊あそばれると思つたか、同じく笑い、

「奥様、あの唯ただいま今いまのお客様でございます。」

「お客だい、誰も来やしないよ、お前まい。」と斜まめに肩かたごしに見遣みやつたまま打棄うつちやつたようにもののすつきり。かえす言ことばもなく、

「おや、おや。」と口くちの中、女中は極きまりの惡わるそうに顔を赤あからめながら、変な顔をして座中を

みまわ

すと、誰も居ないで寂として、釜の湯がチンチン、途切れてはチンという。

手持不沙汰に、

後退にヒヨイと立つて、

ぼんやりとして襖がくれ、

「御免なさいまし。」と女中、立消えの体になる。

見送りもせず、夫人はちよいと根の高い円鬘の鬢に手を障つて、金時絵の鼈甲の櫛を抜くと、指環の宝玉きらりと動いて、後毛を搔撫でた。

廊下をばたばた、しとしとと畳ざわり。襖に半身を隠して老番頭、呆れ顔の長いのを、擡げるがごとく差出したが、急込んだ調子で、

「はッ。」

夫人は蒲団に居直り、薄い膝に両手をちゃんと、媚しいが威儀正しく、

「寝ますから、もうお構いでない、お取込の処を御厄介ねえ。」

「はッはッ。」

遠くから長廊下を駈けて来た呼吸づかい、番頭は口に手を当てて打咳き、

「ええ、混雑いたしまして、どうも、その実に行届きません、平に御勘弁下さいまし

て。」

「いいえ。」

「もし、あなた様、希有でござります。確かたつた今、私が、こちらへお客人をお取次申しましてござりましてござりまするな。」

「そう、立花さんという方が見えたつてお謂いだつたよ。どうかしたの。」

「へい、そこで女どもをもちまして、お支度の儀を伺わせました処、誰方もお見えなさりませんそうでござりまして。」

「ああ、そう、誰もいらつしやりやしませんよ。」

「はてな、もし。」

「何なの、お支度ツて、それじゃ、今着いた人なんですか、内に泊つてでもいて、宿帳で私のいることを知つたというような訳ではなくツて？」

「何、もう御覽の通、こちらは中庭を一ツ、橋懸で隔てました、一室別段のお座敷でござりますから、さのみ騒々しゅうもございせんが、二百余りの客でござりますで、宵の内はまるで戦争、帳場の傍にも囲炉裡の際にも我勝で、なかなか足腰も伸びません位、野陣見るようでござりまする。とてもどうもこの上お客の出来る次第ではござりませんので、早く大戸を閉めました。帳場はどうせ徹夜でござりますが、十二時という時、腕車が留まつて、門をお叩きなさいまする。」

七

「お気の毒ながらと申して、お宿を断らせました処、連が来て泊っている。ともかくも明けい、とおっしゃりますについて、あの、入口の、たいてい原ほどはござります、板の間が、あなた様、道者衆で充満で、足踏も出来ません処から、框へかけさせ申して、帳場の火鉢を差上げましたような次第で、それから貴女様がお泊りの筈、立花が来たと伝えくれない、という事でござりまして。

早速お通し申しましょうかと存じましたなれども、こちら様はお一方、御婦人でいらつしやいます事ゆえ念のために、私お伺いに出ました儀で、直ぐにという御意にござりましたで、引返して、御案内。ええ、唯今の女が、廊下をお連れ申したでござります。女が、貴女様このお部屋へ、その立花様というのがお入り遊ばしたのを見て、取って返しましたで、折返して、お支度の程を伺わせに唯今差出しました処、何か、さような者は一向お見えがないと、こうおっしゃいます。またお座敷には、奥方様の他に誰方もおいでがないと、目を丸くして申しますので、何を寝惚けおるぞ、汝が薄眠い顔をしておるで、

お遊びなされたであろ、なぞと叱言こごとを申しましたが、女いますするには、なかなか、洒落しゃれを遊ばす御様子ではないと、真顔でござりますについて、ええ、何より証拠、土間を見ましてございます。」

いいかけて番頭、片手敷居越に乗出して、

「トその時、お上りになつたばかりのお穿物はきものが見えませぬ、洋服でおあんなさいましたで、靴にござりますな。」

さあ、居合せましたもの総立そうだちになつて、床下まで覗のぞきましたが、どれも札をつけて預りました穿物ばかり、それらしいのもござりませぬで、希有けうじやと申出しますと、いや案内に立つた唯今の女は、見す見す廊下をさきへ立つて参つたというて、蒼あおくなつて震えまするわ。

太う恐いこがりましてこちらへよう伺えぬと申しますので、手前駈出かけだして参じましたが、いえ、もし全くこちら様へは誰方もおいでなさりませぬか。」と、穏おだやかならぬ気色である。

夫人、するりと膝をずらして、後へ身を引き、座蒲団の外へ手の指を反そらして支くと、膝すべを這つた桃色の絹のはんけちが、褌つまの折端おりはしへはらりと溢こぼれた。

「厭いやだよ、串戯じやうだんではないよ、穿物がないんだつて。」

「御意にござりまする。」

「おかしいねえ。」と眉をひそめた。夫人の顔は、コオトをかけた衣衾いこうの中に眉暗く、洋ラ燈ンブの光の隈くまあるあたりへ、魔のかげがさしたよう、円鬘まげの高いのも艶々つやつやとして、そこに人が居けそうな氣勢けいはいである。

暈から、手をもぎ放すがごとくにして、身を開いて番頭、固くなつて一呼吸ひといきつき、

「で、ござりまするなあ。」

「お前、そういえば先刻さつき、ああいつて来たもんだから、今にその人が見えるだろうと、火鉢の火なんぞ、突つついていると、何なの、しばらくすると、今の姐ねえさんが、ばたばた来たの。次の室まのそこへちらりと姿を見せたつけ、私はお客が来たと思つて、言ことばをかけようとする内に、直ぐ忙せわしそうに出て行つて、今度来た時には、突然いきなり、お支度はつて、お聞きだから、変だと思つて、誰も来やしないものを。」とさいぶか訝ふしげに、番頭の顔を熟じつと見ていう。

いよいよ、きよとつき、

「はてきて、いやどうも何でござりまして、ええ、廊下を急いそぎ足あしにすたすたお通んなすつたと申して、成程、登あしおと音がしなかつたなぞと、女は申しますが、それは早や、気のせ

いでござりましょう。なにしろ早足で廊下を通りなすつたには相違ござりませぬ、さきへ立って参りました女が、せいせい呼吸いきを切つて駆けまして、それでどうかすると、背後うしろから、そのお客の身体からだが、ぴつたり附着くつつきそうになります。一番頭は気がさしたか、密そつと振返つて背後うしろを見た、釜かまの湯は沸たぎっているが、塵ちり一つ見当らず、こういう折には、余りに広く、且つ余りに綺麗きれいであつた。

「それがために二三度、足が留まりましたそうにござりまして。」

八

「中にはその立花様とおつしやるのが、剽ひょう軽きんな方で、一番三由屋をお担ひとつぎなさるのではないかと、申すものもござりまするが、この寒いに、戸外おもてからお入りなさったきり、洒し落やれにかくれんぼを遊ばす陽気ではござりません。殊に靴までお隠しなさりますなどは、ちと手重ておも過ぎまするで、どうも変でござりまするが、お年紀としごろ頃、御容ごようす子は、先刻さつき申上げましたので、その方に相違ござりませぬか、お綺麗な、品の可いい、面長おもながな。」

「では、その方は、さような御串戯ごじやうだんをなさる御人体ごじんていでござりますか、立花様とおつしやるのは。」

「いいえ、大人おとなしい、沢山たん口もきかない人、そして病人なの。」

そりやこそと番頭。

「ええ。」

「もう、大したことはないんだけど、一時ひとときは大病でね、内の病院に入っていたんです。東京で私が姉妹きようだいのようにした、さるお嬢さんの従兄いとこ子でね、あの美術、何、彫ほり刻師のしなの。国々を修行に歩行あるしている内、養老の滝を見た帰りがけに煩わづって、宅で養生をしたんです。二月ばかり前から、大層、よくなつたには、よくなつただけで、まだ十分でないツていうのに、肯きかないでまた旅へ出掛けたの。

私が今日こちらへ泊たつて、翌朝あしたお参まいりをするツてことは、かねがね話をしていたから、大方旅行先から落合たがひつて来たことと思つたのに、まあ、お前、どうしたというのだろうね。」

「はッ。」

というと肩をすぼめて首こうべを垂れ、

「これは、もし、旅で御病氣かも知れませぬ。いえ、別に、貴女様あなたさまお身体からだに仔細しさいはござ

りませぬが、よくそうしたことがあるものにござります。はい、何、もうお見上げ申しましたばかりでも、奥方様、お身のまわりへは、寒い風だとて寄ることではござりませぬが、御帰宅の後はおこころにかけられて、さきざきお尋ね遊ばしてお上げなされまし、これはその立花様とおつしやる方が、親御、御兄弟より貴女様を便りに遊ばしていらつしやるに相違ござりませぬ。」

夫人はこれを聞くうちに、差俯さしうつむ向いて、両方引合せた袖口そでぐちの、襦袢じゆばんの花に見惚みとれるがごとく、打傾ふしめいて伏目ふしめでいた。しばらくして、さも身に染みたように、肩を震わすと、後毛おくれげがまたはらはら。

「寒くなつた、私、もう寝るわ。」

「御寝ぎよしなります、へい、唯ただいま今女中おんなを寄越しまして、お枕まくら頭もともまた、」

「いいえ、煙草たばこは飲まない、お火なんか沢山。」

「でも、その、」

「あの、しかしね、間違えて外の座敷へでも行っていらつしやりはしないか、気をつけておくれ。」

「それはもう、きつと、まだ、方々見させてさえござりまする。」

「そうかい、此家は広いから、また迷児にでもなつてると悪い、可愛い坊ちゃんなんだから。」とぴたりと帯に手を当てると、帯しめの金金具が、指の中でパチリと鳴る。

先刻から、ぞくぞくして、ちりけ元は水のような老番頭、思いの外、女客の恐れぬを見て、この分なら、お次へ四天王にも及ぶまいと、

「ええ、さようならばお静に。」

「ああ、御苦労でした。」と、いつてすツと立つ、汽車の中からそのままの下じめがゆるんだか、絹足袋の先へ長襦袢、右の裾がぞろりと落ちた。

「お手水。」

「いいえ、寝るの。」

「はッ。」と、いうと、腰を上げざまに襖を一枚、直ぐに縁側へ這つて出ると、呼吸を凝して二人ばかり居た、恐いもの見たさの徒、ばかり、ソツと退く氣勢。

「や。」という番頭の声に連れて、足も裾も巴に入乱るかのごとく、廊下を彼方へ、隔つてまた登音、次第に登音。この汐に、そこら中の人声を浚えて退いて、果は遙な戸外二階の突外れの角あたりと覺しかった、三味線の音がハタと留んだ。

聞澄して、里見夫人、裳を前へ捌こうとすると、うっかりした裾がかかって、引留め

られたようによろめいたが、衣袴いこうに手をかけ、四辺あたりをみまわし、向うの押入をじつと見る、瞼まぶたに颯さつと薄紅梅。

九

煙草盆たばこぼん、枕まくら、火鉢ひばち、座蒲団ざぶとんも五六枚。

（これは物置だ。）と立花は心付いた。

はじめは押入と、しかしそれにしては居周圍いまわりが広く、破れてはいるが、筵むしろか、畳か敷いてもあり、心持四畳半、五畳、六畳ばかりもありそう。手入をしない困かこなぞの荒れたのを、そのまま押入に遣つかつているのであらう、身を忍ぶのは詭あつちえたようであるが。

（待て。）

案内をして、やがて三由屋の女中が、見えなくなるが疾はやいか、ものをいうよりはまず唇くちびるの戦おのくまで、不義ではあるが思う同士。目を見交みかわしたばかりで、かねて算した通り、一先ひとまず姿を隠したが、心の闇やみより暗かつた押入の中が、こう物色の出来得るは、さては目が馴なれたせいであらう。

立花は、座敷を番頭の立去つたまで、半時ばかりを五六時間、待飽倦まちあぐんでいるのであつた。

（まず、可よし。）

と襖ふすまに密と身を寄せたが、うかつに出らるる数すうでなし、言ことばをかけらるる分でないから、そのまま呼吸いきを殺してイむと、ややあつて、はらはらと衣きぬの音おと信ない。

目前めさきへ路みちがついたように、座敷をよぎる留南奇とめぎの薫かおり、ほの床ゆかしく身に染むと、彼方かなたも思おもう男おとこの人香ひとかに寄よる蝶ちょう、処たがを違ちがえず二枚の襖を、左の外、立花が立つた前に近づき、

「立花さん。」

「……………」

「立花さん。」

襖の裏へ口をつけるばかりにして、

「可いいんですか。」

「まだよ、まだ女中が来るツていうから少々、あなた、靴まで隠して来たんですか。」

表に夫人の打微笑うちほほえむ、目も眉も鮮麗あざやかに、人丈ひとたけに暗やみの中に描かれて、黒髪の輪郭が、細く円鬚まげくぎを劃あかるつて明あかるい。

立花も莞爾にっこりして、

「どうせ、騙だますくらいならと思つて、外套がいとうの下へ隠して来ました。」

「旨うまく行つたのね。」

「旨ゆく行きましたね。」

「後で私を殺しても可いから、もうちと辛抱なさいよ。」

「お稲いなさん。」

「ええ。」となつかしい低声こゝろえである。

「僕は空腹。」

「どこかで食べて来た筈はずじゃないの。」

「どうして貴方あなたに逢あうまで、お飯まんまが咽喉のどへ入るもんですか。」

「まあ……」

黙つてしばらくして、

「さあ。」

手の中へ差入れた、紙包そつを密と取つて、その指が搦からむ、手と手を二人。

隔へだての襖は裏表、両方の肩で圧おされて、すらすらと三寸ばかり、暗き柳と、曇れる花、淋さみ

しく顔を見合せた、トタンに登^{あしおと}音、続いて登^{あしおと}音、夫人は衝^つと退いて小さな咳^{しわぶき}。
さそくに後を犇^{ひし}と閉め、立花は掌^{たなそこ}に据えて、瞳^{ひとみ}を寄せると、軽く捻^{ひね}った懷^{ふところ}紙^{がみ}、二^{ふた}隅^みへはたりと解^くけて、三ツ美^{うつくし}く包んだのは、菓子である。

と見ると、白^{くれな}と紅^いなり。

「はてな。」

立花は思^ひわず、膝^{ひざ}をついて、天井を仰^ういだが、板か、壁か明かならず、低い^ひか、高い^{たか}か、
定^{さだ}でないが、何となく暗^{やみ}夜の天^{あま}まで、布^ふ一重隔^{ひとえ}つるものがないように思^{おも}われたので、やや
急^{せき}心^{こころ}になつて引^ひ寄せて、袖^{そで}を見ると、着^きたままで隠^{かく}れている、外^{がい}套^{とう}の色^{いろ}が灰^ほに鼠^{ねず}。
菓子^{かし}の色^{いろ}、紙^しの白^{しろ}きさえ、ソレ^そかと思^{おも}ゆるに、仰^うげば節^{ふし}穴^{あな}かと思^{おも}う明^{あかり}もなく、その上^{うへ}、
座敷^{ざしき}から、射^さし入^いるような、透^{すき}間は些^{すこ}しもないのであるから、驚^{おどろ}いて、ハタと夫人^{たまため}の賜^{たま}
物^{もの}を落^おして、その手^てでじつと眼^{まなこ}を蔽^{おほ}うた。

立花は目^めよりもま^まず氣^きを判^は然^つと持^もとうと、両^{りやう}手^てで顔^{かほ}を蔽^{おほ}う内^{うち}、ま^まさに人^に道^{みち}を破^{やぶ}壊^{くわ}しよ
うとする身^みであると心^{こころ}付^ついて、やにわに手^てを放^{はな}して、その手^てで、胸^{むね}を打^うつて、が^まばと眼^{まなこ}を
開^{ひら}いた。

なぜなら、今^{いま}そ^そうや^やつて跪^{ひざまず}いた体^{なり}は、神^{かみ}に對^{たい}し、仏^{ぶつ}に對^{たい}して、もの^{もの}を打^{うち}念^{ねん}ずる時^{とき}の姿^{すがた}

勢であると思つたから。

あわれ、覺悟の前ながら、最早もはや神仏を礼拝し得べき立花ではないのである。

さて心から鬼のごとき目を睜みひらくと、余り強く面おもてを圧していた、ためであろう、襖一重の座敷で、二人ばかりの女中と言葉を交わす夫人の声が、遠く聞えて、遙はるかに且かつつ幽かすかに、しかも細く、耳の端はたについて、震えるよう。

それも心細く、その言う処いどころを確めよう、先刻さきに老番頭と語るのをこの隠れ家で聞いたるごとく、自分の居いどころ処あんどを安堵せんと欲して、立花は手を伸べて、心覚えの隔ての襖に触れて試みた。

人の妻と、かかる術すべして忍び合うには、疾とく我がためには、神なく、物なく、父なく、母なく、兄弟なく、名誉なく、生命いのちのないことを悟っていたけれども、ただ世に里見夫人のあるを知つて、神仏より、父より、母より、兄弟より、名誉より、生命いのちよりは便たよりにしたのであるが。

こはいかに掌たなは、徒いたずらに空くうを撫なでた。

慌あわただしく丁ちようと目の前へ、一杯に十指を並べて、左右に暗やみを搔か探さぐったが、遮るものは何にもない。

さては、暗の中に暗をかさねて目を塞いだため、脳に方角を失ったのであろうと、まず慰めながら、居直つて、今まで前にしたと反対の側を、衝と今度は腕を差出すようにしたが、それも手ばかり。

はツと俯向き、両方へ、前後に肩を分けたけれども、ざらりと外套の袖の揺れたるのみ。かつと逆上せて、堪らずぬつくり突立つたが、南無三物音が、ときよツとした。

あツという声がして、女中が襖をと思うに似ず、寂莫として、ただ夫人のものという響くのが、ぶるぶると耳について、一筋ずつ髪の毛を伝うて動いて、人事不省ならんとする、瞬間に異ならず。

同時に真直に立つた足許に、なめし皮の櫛色の靴、宿を欺くため座敷を抜けて持つて入ったのが、向うむきに揃っていたので、立花は頭から悚然とした。

靴が左から……ト一ツ留つて、右がその後から……ト前へ越すと、左がちよい、右がちよい。

たとえば歩行の折から、爪尖を見た時と同じ状で、前途へ進行をはじめたので、啊呀と見る見る、二間三間。

十間、十五間、一町、半、二町、三町、彼方に隔るのが、どうして目に映るのかと、怪

む、とあらず、歩を移すのは渠かれ自身、すなわち立花であつた。
茫然ぼうぜん。

世に茫然という色があるなら、四辺あたりの光景は正しくそれ。月もなく、日もなく、樹もなく、草もなく、路みちもない、雲に似て踏みごたえがあつて、雪に似て冷つめたからず、朧おぼろ夜かと思えば暗く、東雲しのめかと思れば陰々たる中に、煙草盆、枕、火鉢、炬燵こたつやぐら櫓の形など左右ふたなら二列ふたならびに、不揃ぶぞろいに、沢庵たくあんの樽たるもあり、石臼いしうすもあり、俎まないた板あり、灯のない行燈あんどうも三ツ四ツ、あたかも人のない道具市。

しかもその火鉢といわず、臼といわず、枕といわず、行燈といわず、一斉に絶えず微かすかに揺ゆいで、国が洪水に滅ぶる時、呼吸いきのあるは悉ことごとく死して、かかる者のみ漾ただよう風情、ただソヨとの風もないのである。

十

その中うちに最も人間に近く、頼母たのもしく、且つ奇異に感じられたのは、唐櫃からびつの上に、一個八角時計の、仰向けあおもむに乗っていた事であつた。立花は夢心地にも、何等か意味ありげに見

て取つたので、つかつかと靴を近けて差覗いたが、ものの影を見るごとき、四辺は、針の長短と位地を分ち得るまでではないのに、判然と時間が分つた。しかも九時半の処を指して、時計は死んでいるのであるが、鮮明にその数字さえ算えられたのは、一点、螢火の薄く、そして瞬をせぬのがあつて、胸のあたりから、斜に影を宿したためで。

手を当てると冷かつた、光が隠れて、掌に包まれたのは襟飾の小さな宝石、時に別に手首を伝い、雪のカウスに、ちらちらと樹の間から射す月の影、露の溢れたかと輝いたのは、蓋し手釦の玉である。不思議と左を見詰めると、この飾もまた、光を放つて、腕を開くと胸がまた晃きはじめた。

この光、ただに身に添うばかりでなく、土に碎け、宙に飛んで、翠の蝶の舞うばかり、目に遮るものは、白も、桶も、皆これ青貝摺の器に斉い。

一足進むと、歩くに連れ、身の動くに従うて、颯と揺れ、澆と散つて、星一ツ一ツ鳴るかとはばかり、白銀黄金、水晶、珊瑚珠、透間もなく鎧うたるが、月に照添うに露違わず、されば冥土の色ならず、真珠の流を渡ると覚えて、立花は目が覚めたようになって、姿を、判然と自分を視めた。

我ながら死して榮ある身の、こは玉となつて碎けたか。待て、人の妻と逢曳を、と心

付いて、首を低れると、再び真暗になった時、更に、しかし、身はまだ清らかであると、
 氣を取直して改めて、青く燃ゆる服の飾を嬉しそうに見た。そして立花は伊勢は横幅の渾
 沌として広い国だと思つた。宵の内通つた山田から相の山、茶店で聞いた五十鈴川、宇
 治橋も、神路山も、縦に長く、しかも心に透通るように覚えていたので。

その時、もう、これをして、瞬間の以前、立花が徒に、黒白も分かず焦り悶えた時にあ
 らしめば、たちまち驚いて倒れたであろう、一間ばかり前途の路に、袂を曳いて、厚い袍
 を踵にかさねた、二人、同一扮装の女の童。

豎矢の字の帯の色の、沈んで紅きさえ認められたが、一度胸を蔽い、手を拱げば、た
 ちどころに消えて見えなくなるであらうと、立花は心に信じたので、騒ぐ状なくじつと見
 据えた。

「はい。」

「お迎に参りました。」

駭然として、

「私を。」

「内方でおつしやいます。」

「お召ものの飾から、光の射すお方を見たら、お連れ申して参りますように、お使いでございます。」と交る交るいつて、向合つて、いたいたけに袖をひたりと立つと、真中に両方から舁き据えたのは、その面銀のごとく、四方あたかも漆のごとき、一面の将棋盤。白き牡丹の大輪なるに、二ツ胡蝶の狂うよう、ちらちらと捧げて行く。

今はたとい足許が水になって、神路山の松ながら人肌を通す流に変わって、胸の中に舟を纏う、烏帽子直垂をつけた船頭なりとも、乗れとなら乗る気になった。立花は怯めず、臆せず、驚破といわば、手釦、襟飾を隠して、あらゆるものを見ないでおこうと、胸を据えて、静に女童に従うと、空はらはらと星になったは、雲の切れたのではない。霧の晴れたのではない、渠が飾れる宝玉の一叢の樹立の中へ、倒に同一光を敷くのであつた。

ここに枝折戸。

戸は内へ、左右から、あらかじめ待設けた二人の腰元の手に開かれた、垣は低く、女どもの高鬘は、一對に、地ずれの松の枝より高い。

「どうぞこれへ。」

椅子いすを差置かれた池の汀みぎわの四阿あずまやは、瑪瑙めのうの柱、水晶ひやしの廂ひさしであろう、ひたと席に着く、

四辺あたりは昼よりも明あかるかった。

その時打向うた卓子テエブルの上へ、女の童めわらわは、密そつと件くだんの将棋盤しょうぎばんを据えて、そのまま、陽炎かげろうの縋もつるよりも、身軽みかろに前後して樹の蔭かげにかくれたが、枝折戸しおりどを開いた侍女こしもとは、二人とも立花うしろの背後うしろに、しとやかに手を膝ひざに垂れて差控えた。

立花は言葉をかけようと思つたけれども、我を敬うことかくのごときは、打ちつけにものをいうべき次第であるまい。

そこで、卓子こまに肱ひじをつくつと、青く鮮麗あざやかに燦然さんぜんとして、異彩いさいを放つ手釦てぼたんの宝石たよりを便たよりに、ともかくも駒こまを並べて見た。

王将、金銀、桂けい、香き、飛車、角、九ツの歩ふ、数はかかる境にも異ちがはなかつた。

やがて、自分のを並べ果てて、対手あいての陣も敷き終る折から、異香いこうほのぼのとして天上の梅一輪、遠くここに薰はるるかと、遙はるかに樹の間を洩もれ来る氣勢けはい。

円形の池を大廻りに、翠みどりの水面に小波立さざなみつて、二房ふたふさ三房みふさ、ゆらゆらと藤の浪なみ、倒かしまに

汀に映ると見たのが、次第に近くと三人の婦人であつた。

やがて四阿の向うに來ると、二人さつと両方に分れて、同一さまに深く、お太鼓の帶の腰を扱帶も広く屈むる中を、靜に衝と抜けて、早や、しとやかに前なる椅子に衣摺のしつとりする音。

と見ると、藤紫に白茶の帶して、白綾の衣紋を襲ねた、黒髪の艶かなるに、鼈甲の中指ばかり、ずぶりと通した氣高き簾中。立花は品位に打たれて思わず頭が下つたのである。

ものの情深く優しき声して、

「待遠かつたでしようね。」

一言あたかも百雷耳に轟く心地。

「おお、もう駒を並べましたね、あいかわらず性急ね、さあ、貴下から。」
立花はあたかも死せるがごとし。

「私からはじめますか、立花さん……立花さん……」

正にこの声、確にその人、我が年紀十四の時から今に到るまで一日も忘れたことのない年紀上の女に初恋の、その人やがて都の華族に嫁して以来、十数年間一度もその顔を見

なかつた、絶代ぜつだいの佳人かじんである。立花は涙も出ず、声も出ず、いうまでもないが、幾年いくとし月つき、寝ても覚さめても、夢に、現うつに、くりかえしくりかえしいかに考えても、また逢う時にいい出づべき言ことばを未だ知らずにいたから。

さりながら、さりながら、

「立花さん、これが貴下あなたの望のぞみじやないの、天下晴れて私とこの四阿で、あの時分九時半から毎晩のように遊びましたね。その通りにこうやって将棊しょうぎを一度さそうというのが。

そうじやないんですか、あら、あれお聞きなさい。あの大勢の人声は、皆みんな、貴下あなたの名譽を慕うて、この四阿へ見に来るのです。御覽なさい、あなたがお仕事が上手になると、望のぞみもかなうし、そうやってお身体からだも輝くのに、何が待遠くつて、道ならぬ心を出すんです。

こうして私と将棊をさすより、余所よその奥さんと不義こふしをするのが望のぞみなの？」

衝つと手のばを伸して、立花が握りしめた左の拳こぶしを解くがごとくに手を添えつつ、

「もしもの事がありますと、あの方もお可哀かわいそうに、もう活いきてはおられません。あなたを慕つて下さるなら、私も御恩がある。そういうあなたごりようけんが御料簡ごりょうけんなら、私が身を棄すててあげましょう。一所になつてあげましょうから、他よその方に心得こころえ違ちがいをしてはなりません。と強はくいうのが優よしくなつて、果はは涙になるばかり、念被觀音力ねんぴかんのんりき 觀音の柳の露より

身にしみじみと、里見は取られた手が震えた。

後にも前にも左右にもすすくすくと人の影。

「あッ。」とばかり戦いて、取去ろうとすると、自若として、

「今では誰が見ても可いんです、お心が直りましたら、さあ、将棊をはじめましょう。」

静に放すと、取られていた手がげっそり痩せて、着た服が広くなって、胸もぶわぶわと

皺が見えるに、屹と目を睜る肩に垂れて、渦いて、不思議や、己が身は白髪になった、時

に燦然として身の内の宝玉は、四辺を照して、星のごとく輝いたのである。

驚いて白髪を握ると、耳が暖く、襖が明いて、里見夫人、莞爾して覗込んで、

「もう可いんですよ。立花さん。」

操は二人とも守り得た。彫刻師はその夜の中に、人知れず、暗ながら、心の光に縁側を

忍んで、裏の垣根を越して、庭を出るその後姿を、立花がやがて物語った現の境の幻の道

を行くがごとくに感じて、夫人は肅然として見送りながら、遙に美術家の前程を祝した、

誰も知らない。

ただ夫人は一夜の内に、太く面やつれがしたけれども、翌日、伊勢を去る時、揉合う旅

籠屋の客にも、陸続たる道中にも、汽車にも、かばかりの美女はなかったのである。

明治三十六（一九〇三）年五月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成4」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年10月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第七卷」岩波書店

1942（昭和17）年7月22日発行

※誤植を疑った箇所を、底本の親本の表記にそって、あらためました。

※底本編者による語注は省略しました。

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2006年1月30日作成

2020年1月15日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

伊勢之巻

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>